

陳舜臣さんを語る会通信

NO.65

Apr. 2022

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2022年4月20日

魯迅 (1881-1936) 及び 陳舜臣 ^{しゅうきん} 秋瑾 ^{くしゅうはく}、瞿秋白をとおして

私たちは神戸舞子学院を会場に、山田敬三先生ご指導の下、月一回、「みんなで読もう陳舜臣の会」を開いています。今月は特別講座として、山田先生に、魯迅のお話をお願いしました。先生は、『魯迅の世界』、『魯迅 自覚なき実存』（共に大修館書店）などの著書があり、魯迅研究者として著名です。

ところで、ただ、拝聴するだけではもったいないので、私（橘）も、メンバーの一人として身の丈に合った報告をと思い、「陳舜臣さんを語る会通信」第65号を作りました。

わかりにくいタイトルを付けましたが、1. 魯迅の故郷紹興 2. 秋瑾 3. 魯迅「薬」 4. 陳舜臣作品にみる秋瑾 5. 陳舜臣「九雷溪」 6. 陳舜臣さんが描く魯迅 7. 『魯迅詩話』にみる瞿秋白と魯迅、の順で記述します。画像は、阿Qの帽子以外、編集委員の撮影です。（編集委員 橘雄三）

《1. 魯迅の故郷紹興》 魯迅の故居付近を写真で紹介いたします。



魯迅故居一帯 魯迅故里



街中の水路



上の標識、「周家老台門」とありますが、台門とは一族ですむ屋敷のことです。周一族の住居は、老台門、新台門、過橋台門と広がり、魯迅は新台門で生まれました。



魯迅が通った私塾 三味書屋



「孔乙己」の舞台になった咸亨酒店



氈帽 zhan mao



周本家の客間 魯迅の本名は周樹人



甕から飲む紹興酒は格別



紹興といえば阿Qと紹興酒。上は阿Qが被っていた帽子（ネットより）。

下は甕に入った紹興酒。

秋瑾をとおして 魯迅、陳舜臣の作品・著述を見る

《 2. 秋瑾(しゅう・きん 1875-1907) 》



清末の女性革命家。浙江紹興の人。字は璿卿、号は競雄、鑑湖女侠とも称す。日本留学中反清革命運動に参加。帰国後、挙兵計画に失敗、処刑(斬首)。

日露戦争後、中国からの留学生は1万人を超えた。

魯迅の留日 (1902～1909年)

秋瑾の留日 (1904、05年)

【画像】左右二枚は故居の展示物。

秋瑾故居(紹興)



左の画像、秋瑾の写真、特に、その手に持つ短刀については、下の枠内で言及。右は刑場へ向かう秋瑾。

【辞世の句】

「秋風秋雨人を愁殺す」
は、清代の詩人陶澹人の「秋暮遣懷」に拠るとされている。



《 3. 魯迅「藥」(1919年作) に関連して 》

【あらすじ】

茶館を営む華老栓は胸を病む息子のために、銀貨一包みを手に、まだ暗い街を軒亭口へ、「真っ赤な饅頭(蒸しパン)」を買いに出かける。その日、処刑されたのは夏家の息子。小栓はその「藥」の甲斐なく死ぬ。清明節の墓地で、華大媽は一人の老女に出会う。…。

次に竹内実『コオロギと革命の中国』(PHP新書)から抜粋引用します。番号及び下線は編集委員の加筆。

①ここで、わたしの推理を述べよう。それは、— この短刀はもともと魯迅のもので、写真を撮るさいに魯迅から借りたものだ — ということである。



処刑地(紹興 軒亭口)に立つ「秋瑾烈士紀念碑」と秋瑾像

②秋瑾処刑から十年後に書かれた短編「藥」は、秋瑾を哀惜している。その短編からさらに十年、彼の感情も、変化したのだろうか。

③魯迅は「通信」と題する文章で一同郷の秋瑾さんは、このパチパチの拍手によって拍死したのだ—と述べている。魯迅のこの言葉は、いかにも冷たい。

《 4. 陳舜臣作品にみる秋瑾 》

陳舜臣『妖のある』『女侠の墓』から引用します。

秋瑾、字は璿卿。浙江の人である。湖南の名門王氏に乞われて嫁となり、一男一女をもうけたが、革命の情熱が彼女をとらえてはなさない。とうとう離婚して、彼女は日本に留学した。

秋瑾が東京の実践女学校在学中にとった有名な写真がある。彼女の文集の扉で、ぼくはそれを見たが、和服すがたの秋瑾は抜きはなった短剣をかざしているのだった。面長のなかなかの美貌である。

■秋瑾の字、陳さんの文章では「璿卿」で、広辞苑には漢字がなく、ウィキペディアでは「璿卿」です。

このほか、陳舜臣さんは、『孫文(原題: 青山一髪)』『烽火連なる』の章、および『中国の歴史 近・現代篇(二)』『黎明に燃ゆ』の章で、かなりの紙幅を割いて秋瑾を描いています。

瞿秋白の最期をテーマにした陳舜臣「九雷溪」 ほか

《 5. 陳舜臣「九雷溪」 》

くしゅうはく

瞿秋白(1899-1935) ■中国の政治家・評論家。本名、



瞿霜(のち瞿爽)。江蘇の人。ソ連に留学。1927年共産党総書記。漢字のローマ字化や文芸批評にも活躍。国民党軍に捕えられ銃殺。

陳舜臣さんに、『方壺園』所収「九雷溪」という、デビュー最初期の短編があります。まず、この作品を紹介いたします。

【あらすじ】

反政府組織の巨頭、史鉄峯は国民政府軍に捕えられ、身柄は武夷山山岳地帯、仙営の郷紳、余家の邸の一室にある。史は肺を患って寝たきりだが、銃殺処刑されるとき、しっかり立てなければ無様だと、体力を残すことに執着している。

主人公高見清治が車で、福建省西北、九雷溪沿いの難路を仙営に向かうところから話は始まります。余家で史鉄峯の看護をする羅淑芳は、旗袍を着た魅力的な女性で、深くストーリーにかかわってきます。

本作品は推理小説で、一人の殺人と、一人の自死とその幫助がストーリーの中心になります。

私は一読、瞿秋白を思いました。瞿秋白の処刑と「九雷溪」は、時代背景とロケーションがぴったりです。

瞿秋白は、1935年、江西革命根拠地で国民党軍に捕えられ、福建省長汀で処刑されました。長汀は、江西省から武夷山を越え、福建省に入ったところの町です。人物設定もそんなに違いません。史鉄峯は、抒情詩人、反政府組織の巨頭で、宿痾の肺患で寝たきりという設定ですが、瞿秋白は、中国共産党の初期最高指導者の一人で、散文家、評論家としても有名です。また、肺結核を病み、療養しながらの活動だったのも同じです。

あとで知ったのですが、『宝石』昭和38年9月号掲載、『ある作家の周囲—陳舜臣論』「自作を語る」に、「九雷溪」について、次の記述があります。

福建で処刑された瞿秋白の最期を、これまた私なりに想像を駆って書いた。小説家の生命は、イメージネーションにあると私は考えている。

長汀には、瞿秋白が捕われ後、処刑までを過ごした部屋が残されており、処刑地には、大きく立派な記念塔とその横に、「瞿秋白同志就義地」の石碑があり、小さな「瞿秋白烈士陳列室」が建てられてい

ます。なお、「九雷溪」は本通信第14号でも取り上げています。併せて、私のHP『中国の友人たち』『井岡山・瑞金への旅』も見て下さい。

<http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/>



長汀で瞿秋白が「囚禁」されていた建物、部屋上の画像の通路奥に下の部屋がある

《 6. 陳舜臣さんが描く魯迅 》

陳舜臣さんは、『巷談 中国近代英傑列伝』第三章「革命と反革命と」に、“中国人の「たましい」を革新する魯迅”という節を設け、次のように記述しています。

1911年、辛亥革命によって帝国体制は倒され、中国は共和体制に移行します。「体制」は文字のとおり、人間の体にあたります。近代中国の「からだ」をつくったのは孫文であり、「たましい」をつくったのは魯迅です。

また、陳舜臣さんは、最初期の作品、『狂生員』『厨房夢』『回想死』の三作を含めた9作を収録する短編集『わが集外集』を刊行するとき、「わが集外集—あとがきに代えて」で次のように記述しています。

魯迅に『集外集』と題した著作がある。彼の作品は新聞、雑誌に発表すると、待ちかねたように集められて出版される。だが、なかにはそれに漏れたものがあり、そうしたものを集めたものが『集外集』であった。

本書は私の『集外集』である。

高田淳著『魯迅詩話』に見る瞿秋白と魯迅

《7.『魯迅詩話』にみる瞿秋白と魯迅》

くしゅうはく

瞿秋白処刑地には、大きく立派な記念塔とその横に、「瞿秋白同志就義地」の石碑があり、小さな「瞿秋白烈士陳列室」が建てられています。ここまでは既に記述しました。その続きです。

「陳列室」に次のような対聯が掛かっていました。

人生得一知己足矣

(右の写真 →)

斯世當以同懷視之

これは、魯迅が洛文（ローウエン）の署名で書いたもので、瞿秋白への心情を『何瓦琴の語』を借りて吐露したということです。このことは、高田淳著『魯迅詩話』（中公新書）に、詳しくでております。

以下、同著 p.202-204の記述です。

瞿秋白と魯迅との公的かつ私的な交渉について、いまは、当時二人の往来を、伴侶として見守っていた許広平のこぼれ話を引用するにとどめる。それは、一九三二年の春から始まる。

「紹介者を通じて、革命のために地下生活を送っているある人が、このよい気候にまぎれて散歩に出て、太陽を仰ごうとしているのだが、適当な場所がなく、困っている、といったきた。問いただした結果、『まだ会わぬさきからとても親しい人』一秋白同志であることがわかり、日を定めてわたしの家で終日のんびりしてもらうことにした。その日の陽気は格別うららかで、天さえ立派な人間にそむかぬみたいだった。陽光が斜めに東の窓にさしこむ早朝、紹介者がはじめて訪れる珍客をとまなび、わたしはの住まいにあらわれた。秋白同志のほかに楊之華同志もいた」。楊之華とは、瞿秋白夫人である。

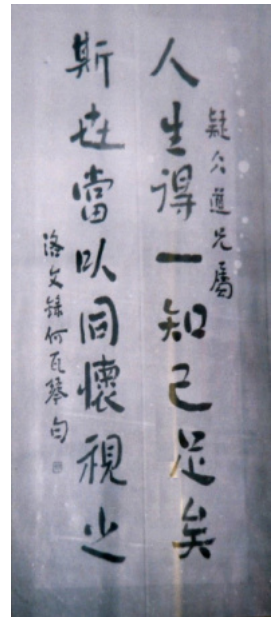
「二度目の避難は一九三三年二月のことだが、そのときの滞在は短く、二月末にかれは去った。…今度秋白夫婦が同じ北四川路の東照里に移って来て、道のりも近くなり、いろいろな日常生活の必要も、わたしが代わってしてあげたし、魯迅も頻繁に往来するようになった。かれらの部屋は普通の家庭のようによく整っており、魯迅が洛文の署名で書いた『人生得一知己足矣 斯世當以同懷視之』（人生は一知己を得れば足れり、斯の世は當に同懷を以てこれを見るべし）という、秋白および党への心情を『何瓦琴の語』を借りて吐露した対聯もかかっていた」。

「三度目に秋白夫婦がわたしの家に避難したのは、東照里を去ってのちの一九三三年七月の後半だった。それは党機関が敵に発見されたため、深夜のほぼ二時ごろ、わたしたちも魯迅も寝ているときだった」。

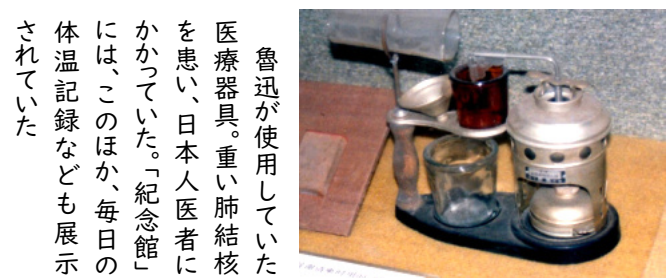
「一九三四年一月はじめ、秋白同志は上海を離れて江西中央革命根拠地へ去った。出発に臨んで、魯迅

の住まいにおわかれに来た。そのとき、魯迅はとくに惜別の情を示して、自発的にベッドを秋白同志に譲り渡して、ゆっくりやすんでもらおうとわたしにいいつけ、自分は床の上に臨時に寝床をしつらえた」。瞿秋白は、それからまもなく瑞金に入る。

「その後、突然福建から一通の手紙を受取った。秋白同志が不幸にも敵の捕虜となった。はじめは医者装いをし、しばらく敵をだましお世話の手紙で救済を求めて来たのだ。だがついに敵に知られると、かれはいささかもかくすことなく、刑場で『革命のために犠牲となることは、人生最大の光栄だ』と高らかに叫び、惜しみなく生命を捨て、勇敢にその身をささげたのだった」。ときに、一九三五年六月十八日、三十六歳であった。



上海にある「魯迅公園」及び「魯迅紀念館」の入口



魯迅が使用していた医療器具。重い肺結核を患い、日本人医者にかかっていた。「紀念館」には、このほか、毎日の体温記録なども展示されていた



魯迅公園の魯迅座像
この右手奥に魯迅は眠る